

遠洋航海者：太平洋の人々と文化史

阿子島 香

[東北歴史博物館館長講座概要：歴史博物館グローバル紀行④]

2024 年 7 月 27 日

講座要旨

新シリーズでお話をします館長講座の4回目です。「歴史博物館グローバル紀行」と題し、世界各地の博物館を、皆さんとご一緒に巡ります。考古学と歴史を中心にして、海外のミュージアムを訪ねて、各地の展示と郷土史を、世界史の視点から考えていきます。全8回の連続講座ですが、各回は独立した内容ですので、お楽しみください。今後の内容は、次のように予定しております。⑤戦争の記憶をつなぐ展示と歴史観、⑥南フランスの遙かなる先史時代、⑦ネイティブ・アメリカンの世界1、⑧ネイティブ・アメリカンの世界2。「博物館学」という研究分野があり、「学芸員資格」を取得する要件として多くの関連科目の履修があります。今年の館長講座は、いわば「博物館展示論」と、「世界史の散策」とのクロスオーバーと考えていただければ幸いです。おおむね、アメリカとフランスの博物館を主にしますが、適宜ほかの国々の博物館にも触れています。またお話の内容では、時々、旧シリーズすなわち「東北グローバル考古学」の全24回の内容と関連させつつ、参照していきたいと思えます。旧シリーズは、引き続き東北歴史博物館のHPにて、講座概要を公開しております（多くは「読む館長講座」として、改めてエッセイとして再構成したものになっています）。あわせてご参照いただければうれしく存じます。

今回は、7月15日の「海の日」に寄せて、人類にとっての海洋の意味を少し考えてみることに致しました。海は、旧人の時代まで長い間、越え難い「障壁」でしたが、新人の時代になると、海を渡る能力が出てきました。新人が飛躍的に発達させた象徴能力、認識と行動の構造的な能力の一環でした。最大の海、太平洋にも、次第にホモ・サピエンスは進出し、ポリネシアの真ん中（遠隔オセアニア Remote Oceania）に至るまでが人類の生活圏となりました。しかしながら、大海洋は厳しい場所です。人類は約4万年前頃にはオーストラリアに到達しましたが、遠洋航海者となるには長大な時間が必要でした。後期旧石器時代の技術で、台湾から日本列島の南西諸島に至る実験航海が試みられましたが、黒潮を越える困難に直面しました（国立科学博物館プロジェクト）。一方で、伊豆諸島神津島の黒曜石が、本州の後期旧石器時代遺跡から出土する事実は、新人の渡海能力を示しています。世界各地での海洋への進出は、次第に現実となって、障壁だった海は、やがて「シーロード」、移動・交流の道となりました。講座では、太平洋の人々と文化史を研究、展示する総合博物館を訪問

して、いわば最後の人類フロンティアである、遠隔オセアニアへの大航海の歴史や、そこに暮らす人々の文化を探究してみましょう。

米国ハワイ州のホノルルに、ビショップ博物館があります。ワイキキ・ビーチやダウンタウンからは、北西の近郊になり、路線バス（The Bus）で容易に行けます。Bernice P. Bishop Museum は、太平洋地域の人類学、考古学、歴史学、動植物などの、最大の研究拠点であり、ハワイ州最大の博物館です。1889年に設立され、歴史的な建造物である本館の周囲の広大な敷地に、いくつもの展示施設、体験施設、プラネタリウムなどがあります。古い歴史と伝統の上に、展示室のリニューアルが順次進められ、現代的なミュージアムとなっています。ポリネシア文化に関するコレクションは、世界有数で、昆虫などの自然史標本も充実しています。収蔵品の総数は2500万点ということです。本館の展示室では、大きな二つのホールが見どころで、ハワイの歴史を主にするハワイアン・ホール（2009年に復元的リニューアル）、ポリネシア全体を見渡すパシフィック・ホール（2013年にリニューアルオープン）があります。またカメハメハ大王以来の、ハワイ王国（1795～1893）の至宝を展示する部屋もあります。この博物館は、実業家の Charles R. Bishop が、妻 Bernice Pauahi を追悼して創設しました。彼女は、カメハメハ王家の最後の直系子孫でした。講座では、これらの展示を中心に、人類の太平洋進出の歴史と伝統的航海術、海域のさまざまな文化史、ハワイ王国の成立から米国の50番目の州になるまで（1959）を視野に考えてみます。

伝統航海術は、一度は途絶えかけましたが、ミクロネシアのサタウル島に技術を伝承する古代航法の達人が見出され、在来の手法で建造した「チェチェメニ号」で、1975年にサタウル島から沖縄海洋博会場まで、約3000kmの航海に成功して話題となりました。チェチェメニ号はアウトリガー・カヌーで、大阪の国立民族学博物館で常設展示されました。またビショップ博物館が関わった「ホクレア号」は、ダブル・カヌー（双胴舟）で、1976年にハワイからタヒチへ約一カ月の航海に、やはり伝統航海術のみで成功し、その後も遠洋航海を継続的に行なっています。帆を張り（パンダナスの葉）、星を観測し（東から上る星など、150を記憶して航海する）、合わせて、風向き、海流、うねり、鳥の動き、漂流物、雲などを総合して航海を指揮する高度なわざです。ビショップ博物館のプラネタリウムで解説がありました。星を記憶するために、石を並べた海図を作ります。

多くの展示から、ハワイ諸島およびポリネシア、メラネシア、ミクロネシアの地域性ならぬ「海域性」の特色を学ぶことができます。一方で、太平洋海域での、かなり共通している文化もあります。講座では、カヌーの種類と特徴、樹皮布（タパ）文化の広がりや芸術性、さまざまな神像と神話、考古学の遺跡（祭祀の場であるヘイアウ）、生業とその道具（釣り針の各種、タロイモの栽培と加工、石器各種）、サメの歯を並べて埋め込んだ武器（首長層の威信）、貴重な鳥の羽を贅沢に用いた衣裳、などを紹介します。ビショップ博物館の研究者では、篠遠喜彦博士（“Yoshi”）を忘れることはできません。先生は、1954年にホノルルで下船してから、50年以上に渡って、ポリネシア考古学に大きな足跡を残されました。2017年10月4日にご逝去され、改めて追悼の意を表したいと思います。

トピックス

以上は、全体の要旨です。以下に、スライドで解説した内容から一部を選んで、项目的にご紹介します。

・今回講座の副題は、「海の日を考える、海の民の歴史」としました。明治時代以来の歴史学では、日本人の歴史を考えるに際して、稲作農耕民の基層文化を中心に考察してきた傾向が強いようです。歴史の流れを動かしてきた「平地人」に対しての「山の民」「海洋民」、生業では狩猟・採集・漁労、また村落定住民とは異なる漂泊民などについての関心が復権したのは、1980年代のいわゆる「社会史」への関心と軌を一にするように思われます。「平地人を戦慄せしめよ」（柳田国男、『遠野物語』序文）の言葉に象徴的ですが、その後の民俗学がアカデミアの中で確固とした位置を占めるようになったのも、1970年代以降といわれるように、「在野の学問」的な性格を持っていました。

・太平洋の縁辺に位置する日本列島を考えるには、アジア大陸との「陸のつながり」とともに、「海への広がり」も視野に入れる必要が大きいと思います。そこで、人類史における大きな課題である、ホモ・サピエンスの海洋への進出について、ポリネシア文化を研究する代表的な博物館を訪ねて、遠洋航海者の文化を考えます。

・今回講座は、ビショップ博物館の展示を中心にポリネシアの歴史を考える趣旨です。また多くの先学による研究の蓄積を参考とさせていただきました。ちょうど「みんぱく」（国立民族学博物館、大阪府吹田市千里）創設 50 周年記念国際シンポジウム「海域からみる人類の文化遺産」（2024 年 5 月 11 日・12 日、小野林太郎氏まとめ）を聴講する機会があり、研究史の現在地を確認することができました。1 日目は東南アジア、太平洋の博物館の諸問題、オセアニアのカヌー文化、2 日目はオセアニアの樹皮布をテーマに進められました。またチェチェメニ号に関する「海工房」の業績（宮澤京子氏）、環太平洋のカヌー文化の総合（後藤明氏、また『南山大学人類学研究所モノグラフシリーズ 1』2022）に多くを学びました。

Bishop Museum DVD “The Navigators” (1983) も入手できました。実は民博が創立された 1974 年から、私は継続して「友の会会員」いわば「推し」で、もう 50 年になります。考古学が専門である私の民族学の、学びのリソースでもあり、先生方とも懇意にさせていただき感謝いたします。ちなみにですが、当東北歴史博物館の前身である東北歴史資料館が創立されたのも、同じ 1974 年で、50 周年になるのですが、現博物館の 25 年が公式です。余談ですみません。以上謝辞でした。

・ビショップ博物館の展示ホール、ハワイアン・ホールとパシフィック・ホールは、中央部が大きな吹き抜け状の展示空間を構成し、周りに展示室が並ぶ構造になっている。各階にそれぞれ特徴的なテーマで個別の展示があり、VTR やタッチパネル方式の視聴覚的な展示部分も充実している。スライドの多くは、館長撮影であるが、あくまでも同博物館の画像である点をご留意願う（SNS 等）。

・太平洋海域は、ミクロネシア、メラネシア、ポリネシアに分けられている。ミクロネシアは、かつての日本統治「南洋群島」を含み、カロリン群島の北方は南北に連なるマリアナ諸

島になる。ミクロネシア連邦のサタワル島、ブルワット島に、伝統航海術が伝えられていた。チェチェメニ号、またホクレア号は、ここに伝承されてきた航海術による、実験航海で有名になった。

- ・メラネシアは、黒い色の人々の海域という意味を持ち、ニューギニア島から東方へ、ソロモン群島を含む海域で、東部はフィジーやニューカレドニア（現在もフランス直轄領）でポリネシアとつながる。近代人類学の創始者マリノフスキーが研究した、「クラ交易」で知られるトロブリアンド諸島を含む。

- ・ポリネシアは、ミクロネシア、メラネシアの東方の広大な海域で、ハワイ諸島、ニュージーランド（アオテアロア）、イースター島（ラパヌイ）を結んだ大三角形の範囲とされる。ニュージーランドの先住民は、マオリ族。ホクレア号は、ハワイ諸島とタヒチ島の間を伝統的技術で航海し（1976年）、その後も実験航海を続けている。

- ・ビショップ博物館のプラネタリウムは、展示施設も併設されて総合的な学びができる。写真巨大な地球儀で、画像では人類の広がったルートが示されているところ。台湾、フィリピン方面から、インドネシア（メラネシア）方面に赤い矢印（人類移動）。そして北方のミクロネシアへ。さらに東方のポリネシア、そしてタヒチから北上しハワイへ、南下しニュージーランドへ、はるか東へイースター島にまで至る。プラネタリウムでは、1日4〜5種類のプログラムが提供され、一部日本語もあった。伝統的な遠洋航海者の技術を解説する番組、学芸解説者が操作しながら直接に話す時間もあった（2013, 2014 訪問時）。かつてのミクロネシアの大航海師が、このプラネタリウムを利用して後進の航海術師を指導したこともあったとのこと。航海術の重要な要素である星々の動きを再現しての指導だったという。

- ・航海術の天体観測では、周囲に石を並べて線で結ぶ図が、記憶と伝授に使われる。石はそれぞれの星を表わし、特定の星が、東の水平線から上ってくる状況を観察して、現在地を知る。次々にのぼる星々を 150 ほど記憶していて、航海術に用いる。木の枝を組み合わせた「海図」も存在した（本館展示）。

- ・本館の各展示室では、太平洋のそれぞれの海域での伝統文化の解説が充実している。講座では、ハワイ、トンガ、サモア、ニュージーランドなどの展示を紹介。釣り針の多様性と型式学、石器と石材、ヒスイとネフライト、石斧のポリネシア的な集成（実物）、丸木舟の製作など。

- ・パシフィック・ホールでは、リニューアルした木製フロアが、ポリネシアの地図になっていて、自分の足でポリネシアの島々を旅するように動き回れる。今クック諸島で、フィジーへ、のように。博物館の展示では、地図は普通、壁掛け式になるので、なるほどのアイデアとを感じる。壁面の大画面では、大海洋を航海するカヌー文化が、復元画と模型で示される。シングル・アウトリガー・カヌー、ダブル・カヌー、双胴船（舟）を結ぶ方式と積み荷、帆柱と帆の掛け方、逆三角形の帆、ヘサキとトモ（舳と艫、船首と船尾）、それらの装飾と象徴性、その他ポリネシアの各海域でのカヌーの多様性が分かりやすい。遠洋航海者たちが使用していたのは、主としてダブル・カヌー（双胴船）。

・ポリネシアへの人類移住については、考古学上の文化である「ラピタ文化」が重要。タッチパネル方式のモニターで、ラピタ文化の重要な意義を語るのは、ポリネシア考古学の第一人者である、パトリック・カーチ氏（カリフォルニア大学バークレイ校、2014）。（現ハワイ大学マノア校、館長注）。モニターの中で、格子目文のあるラピタ文化の土器を解説。ラピタ遺跡は、フランス領ニューカレドニアにある標識遺跡。展示パネルでは、ニューギニア島東部から、ソロモン群島、バヌアツ、トンガまでの、ラピタ文化遺跡の広がりを表示。この文化はメラネシアからポリネシアへ広がった（各展示は館長撮影）。

・神々の像の展示を解説。ポリネシアでは多神教の神々が造形されて、偶像として崇拝された。KU（クー）は、守護神で重要なカミ。戦士を守る役目も大きい。鳥の羽を集めて、像を表現する。戦士たちは、サメの歯を埋め込んだ棍棒を持って戦う。戦闘は、象徴的な社会的意義もあった。ポリネシア諸島の社会は、首長制社会の段階に進化していた。高位の戦士たちは、また王権のシンボルとして、多くの神々と結びついていた。

・女神の偶像各種。多産と豊穡をもたらす神々。ポリネシアの生業は、複合的な構成で、漁労（釣り針、網、銚、叩き棒の展示紹介）、農耕（タロイモが非常に重要）、家畜としてのブタ（財産の意味が大きい）。宴会では、ブタを振る舞う広域的な文化が広がる。結婚などに際しても、財産としてのブタが必要。

・ブタの牙をつないだ装身具。貝に穴を開けてつないだ装身具。ミクロネシア、ヤップ島の「石貨」（石に穴を開けた貨幣で、巨大な石貨もある）。

・「樹皮布」（タパ）は、ポリネシア、メラネシア、ミクロネシアの、広大な範囲に分布する。太平洋海域の標準的な衣料素材のひとつ。美術的にも優れているとの評価が高い。図案や意匠の研究が蓄積されている。制作の道具の展示。木製の台の上で、樹皮を木の槌で叩いて伸ばす。重ねて接着する。樹種は、カジノキが主。コウゾ（和紙の原料）の仲間。模様を刻んだ槌に顔料・染料を付けて、叩いて紋様を表現する。

・「サメの歯を植え込んだ武器」は、太平洋海域に広く分布している。木製槍に紐で固定（ギルバート諸島で、1898年に購入のラベル）。ヘアピン形に曲げて持ち手を付けた棍棒の外側にサメの歯を並べて埋め込んだ資料など、各種の形がある。

・タロイモ加工具の展示。主要な栽培植物で、木製の皿の上で、分銅形の磨製石器でつぶし、モチのようにして食べる。軽く発酵した粥状のものは「ポイ」という。（ホノルルのフードコートなどで、伝統料理をアレンジしたセットが味わえる。たとえば、生サカナのサイノメ切りの香辛料入り和え物は「ポケ」、マグロの和え物は「アヒ・ポケ」、タロイモの葉で包んだ石蒸し焼きは「ラウラウ」など。館長注）。

・ハワイ王国の、王室の系譜と至宝の展示も充実している。希少な鳥の羽を多数、集めて固め、槍のように捧げて立てて、高貴な人々の行進で、掲げて歩く。また高位な戦士たちの衣裳にも、鳥の羽が使われる。背中に被るマントや、頭飾りがある。

（本稿は、館長講座での配布要旨に補足したものです。）